

ルーチン

【routine】 日常の仕事。日課。決まりきった手続きや手順。

一

「兄ちゃん、おはようございま—— すー！」

今朝も来た。玄関脇、事務所の入り口を臆面もなく潜^{くぐ}つて来る。

時計の針は七時一五分を少し過ぎた。例によって正面玄関の自動ドアはオフスイッチのまま。来客側からは自動で開閉するが、施設内からはタッチパネル式のセンサーで開く。そのセンサーをオフしている。

ここはF県S市の高齢者介護施設。相手は認知症の入所利用者S。自動ドアのカラクリを知り得ないから離設出来ない。

「チョッとそこまでお参りに行かせてもらいますですね。」

いつもの真顔が余計に真北をイライラさせた。

目線を合わせず小柄な肢体に一瞥「おはよう……」と挨拶する。その洗面を相手に悟られまいとして、自分のデスクに視線を投げる。

デスクの上には昨日退社後、遅出勤だった職員たちの報告書やサービス計画書の原案が殴り書きしてあり、上司に修正を求めている。

ちゅッ、と軽く舌打ち。

Sは躊躇なく玄関まで足早に、いつまで経つても開かないドアを訝しげに睨みつけている。

何秒かの後一息吐き、去つていく。又出直すか—— と。

二

毎朝七時過ぎには出社している。真北^{まきた}理^{おさむ}。「介護長」そう呼称されるようになって一〇年以上経つ。

始業は八時半だが自分に課したルーチン。どの部署のどの職員よりも真つ先に出社し、利用者の状態を確認する。

指定のユニフォームに更衣し、横切る食堂ホール。利用者それぞれの指定の場所。いつもの朝食を待つ風景。

日常のそうした風景に「欠落」があれば、其れは即ち利用者の「変調」を意味する。

体調不良。状態急変。後期の高齢者にはいつものルーチンがこなせなくなる。朝、永遠に目を覚まさないことだつて……。

夜間の状態急変。バイタルサインの異常。不規則な呼吸に呼名への無反応。オンコール待機看護師への応援要請。協力医療機関への救急搬送。家族への状況説明。

深夜、枕元の携帯が目覚まし規則正しい秒針のリズムを、突然かき消す。

これまで何度も経験してきた。「真北介護長！夜分にすいません。至急来園願います！」

昨夜は特別な夜ではなかったようだ。

誰よりも早く出社する日常に「欠落」がないことを早く確認したい。当落線上で結果を待つ受験生の心境か。大げさでは無い。

今朝も利用者全員が無事に朝を迎え、まずはその日の日課を過^こせる期待に安堵する。

高齢者には明日より今日。今日一日がなければ明日も来ない。朝を迎えられた無事を誰へともなく感謝する。

同時に、無事に夜勤を乗り切った職員へも「お疲れッ。ご苦労さま……」と目礼する。頭が下がる。嘘では無い。

相對し、言葉に出しては言えない。感謝している。照れ隠し。暗黙の了解。

三

夜勤の苦労は経験済みだ。肉体的にキツイ。夕方入社し翌朝退社する。その間十七時間。足を投げ出して休息する時間はある。

利用者の状態確認と見守りが業務だが、水分補給や投薬、点眼、トイレの介助や下の世話他、雑多なルーチンが待っている。

夜勤の入りは特に不安が多い。精神的にキツイ。もし、誰かが急変したら……。もし、うつかりウトウトした隙に、誰かがベッドの下で転んでいたら……。

夜勤者は四名。ショートステイ利用者を含め九〇名弱を対応する。担当するフロアー利用者の状態や個々人の留意事項の確認。

日勤者から申し送られた突発的な体調不良者への注意や禁忌事項。一般処遇の申し送り事項に社内業務に関するお知らせ……。云々。それらをメモつてもう一度肚に落とし込む。

急変時の対応は一応、理解しているはず。月毎の勉強会で一度取り上げたテーマだ。実践した経験が乏しい。

今夜も無事に乗り切れる……。

新人も一〇年選手も、そう楽観的に思考したいのだ。

夕食が終わり、イブニングケア。遅出職員が退社すると施設内に少しずつ静寂がやって来る。二十一時頃には大概のお年寄りがベッドの中。既に寝息をたてている。

ルーチンの業務く巡回く静寂く突然のナースコールがそれを破る。繰り返す。順調なら翌朝まで。

四

利用者のSは今年の春入所してきた。八七歳。

出生後間もなく、扶持減らしに寺へ幼女として送られ、後に復員した夫とともに鮮魚店を営み一子をもうける。

戦傷を負った夫の天逝後は鮮魚店をたたみ温泉街のアパートに借家し、傷痍軍人の恩給と旅館の仲居をしながら一人息子は不自由させた覚えが無い。

戦後の混乱、高度成長、そうした社会背景はともかく、女手一つ幼児と二人生きて行くには苦労も多かつたはず。

毎日、精一杯生きた。誰にも媚びず炳炳丹丹として……。

長男の独立を機に独居し、老年を迎える頃には三国町の檀那寺（智敬寺）へ草むしり他、寺務の手伝いに通うようになる。

電車で向かい、夕餉を馳走され、寺の者に自宅まで送り帰してもらう……。をほぼ毎日繰り返した。

年々歳々物忘れを自覚し、薄貨の恩給も濫財。何処で何に遣ったか覚えが無い。遣ったことも忘れた。そのうち、お金の価値すら忘れた。お金……？

「行かないと——」

「お寺に行かないと——」

とにかく通った。毎日の拘泥。固執。ルーチン。

あそこに行けば何かある。自分を知る場所。自分を自覚する何かがある。

少しずつ壊れていく気がしてならない。頭に霞が懸かって拭えない。名前は覚えている。不安でならない。どうしようもなく落ち着かない。気が急ぐ。あそこでなければ。確かめたい……。

自分の正体を。

心配した寺の住職が京都市内の長男に連絡を入れる。
「正克君、母さんボケたみたいだ」
えっ？

市の福祉担当者に相談して病院を紹介された。精神科。
認知症・・・そう診断された。

五

真北は正克夫婦と入所に関する事務手続きをとった。重要事項の説明と契約内容、料金体系、緊急の連絡体制。利用者の日課や過ごし方。

Sも同席して相槌を打ちニコニコ破顔。愛想笑いか。ここ二、三日の陽気のせいか。施設に敷設するフェンス内側の桜の枝もすっかり葉桜だ。新穀鮮菜美果。そんな季節を予感させる。

長男の正克は地元の高校を卒業後、料理人になりたいと単身京都の料亭で修行した。今では自身の店『食味処 安ず喜(あずき)』も持て、馴染みも増えて比較的順調だ。

「お袋、こつちに引き取ろうか・・・」

そっ、妻に相談したこともあった。結婚して一〇年だろうか。

「私はあなたに従うだけよ」

妻は理解してくれている。これまで夫に逆らったことなど一度も無い。夫婦喧嘩すら無かった。

従順だがしつかり者。ふたりで築いてきた。鴛鴦連理の枝。

晴天に一朶の雲。

もつと早く決断していれば・・・と。

商売も軌道に乗り繁盛しだし忙しさに感^かめて、ついつい母親を頭の隅に片付けた。同居を逡巡した。

いや、自分たちの生活を優先した。母は無事に違いない。達者で暮らしている。これまでずっとそうだった。気丈な母親。

つい先日智敬寺の住職は「毎日来ている。元気にしている。」「君の商売の繁盛を願ってるんだろっ」と言っていたはず。

息子の話になると自慢気で快哉^{かいさい}して止まない、とまで。

だが・・・

深く首^{こぶ}を垂れた。

「どうかよろしくお願いします。こつちは再々は無理ですが、せめて月一ぐらいは顔を見せるつもりです。」

少し眼が充血している。長時間、高速道路を運転して帰郷したせいだけでは無いはず。

駄々を捏ねられる前に強い口調で、否、自分を奮い立たせるつもりで正克は言った。

「お袋、これからこつちで生活するんだからね。」

「お前たちもだろっ」

破衣錦心。無垢な笑顔で頷くS。

妻は親指の腹で目じりの涙を切った。

六

Sには内科的疾患は無い。これまでの生活暦、家族に披瀝^{ひれき}しても大病を患った事もないと。病院へ通ったのは風邪で咳き込んで内服を処方してもらったくらいだろう。膝の関節も痛くない。

何処へだって歩いていける自負がある。ただ左眼が見えない。ほぼ視界ゼロだ。

認知症と診断を受ける前からも、自覚を伴う症状は無かった。だが、旦那寺参詣が日常化した頃、少し前頭葉に違和感を感じていた。軽い目眩や頭痛の類だと高を括った。

認知症Ⅱ（一旦獲得した知能や正常に発達した精神活動が、脳の器質的病変により後天的又、非可逆的に後退、減退し回復不能な状態）

認知症をきたす疾患としてアルツハイマー型や脳梗塞後遺症、レビー小体型認知症、アルコールや薬物依存等知られている。

統計的には生来の真面目さ几帳面さ、神経質で繊細な性格の持ち主、ストレスを内包し易く、上手に発散できない内向的タイプに多いと聞くし、事例を挙げれば、仕事一筋の会社人間だかが退職後、気持ちの張りも霧散し怠惰無為に過すうち、次の生き甲斐を見出せないまま・。あるいは経験的には学校の教師や公務員がどうか。

Sは明朗快活、気丈で何事も前向きな性格。ひとり息子は母子生活で泣き言ひとつ聞かなかつた。

その子の養育義務を終え、独立を機に心の拠り所を無くしたか。自宅内外での会話の少ない刺激の薄い生活で、少しずつ病魔が全脳を蝕んでいく。ゆつくりと確実に。いずれにせよ経緯は状況証拠で確たる物証は無いし、器質的病変かどうかも怪しい。

又、認知症患者には記憶障害や判断力、理解力低下等Ⅱ中核症状があるが、認知機能の低下から周囲の状況を正しく把握出来なくなり、誤認したり、虚構の世界に独り置き去りとなつて徘徊やせん妄、不眠、易怒先鋭、精神的後退、収集、介護抵抗、攻撃的行動、常同行動等のBPSD（認知症における行動と心理学的症状）へと結びつく。これが認知症介護を家族に重荷足らしめる喫緊の近因となっている。

「ゆつくりと急かさず、一緒に寄り添いながら、諸々の問題行動を失敗行動として捉えるのでは無く、言葉を尽くせない認知症患者からのメッセージという捉え方が必要」と。

さる研修で講師役の大学教授が嘯くが、どうせそんな経験無いくせにと、得心至らず吐で舌を出す。

七

Sの場合はどうか。

記憶の記名、保持、起想といった一連のプロセスには確かに弱いが、会話能は衰えず喜怒哀楽も生来のままを保持している。

食う寝る等の基本動作、入浴や更衣、歯磨き洗面と云った日常生活動作も高レベル。施設内の空間認識やエレベーターも独りで乗り降りする。閑話休題。

介護施設は年々、高度医療と相まって入所利用者の重度化、長寿化、医療依存度の偏重が進んでいる。寝たきりや認知症高齢者は言うに及ばず、胃瘻や腸瘻、経鼻経管栄養、常時の喀痰吸引、ストーマ、インスリン注射等の医療行為が必要な高齢者がそうだ。そうした高齢者は最初からその病態であった訳ではなく、一旦あるいは何度となく繰り返し、医療機関を経由してそうなった。

長寿化しても健康で居られる期間が延びた訳ではなく、白く清潔な医療機関の病床でシミの付いた天井を見上げて、無為に生かされる……。

医療機関の入院在籍日数はそのまま不健康寿命に比例する。加療の要が無くなれば医療側は退院を迫り、当然生き場所を失う危険は冒せず（この時点で家族介護は放棄）結果、介護施設への申し込みは後を絶たない。

実は今春、一部介護職員へも一部医療行為が認められた。「一部」とは膨大な時間と労作を基礎と実務の研修に充てて、ようやく経管栄養の接続と痰の吸引の2つの医療行為を可能ならしめるもので、限定的な職員による限定的な行為。

介護施設の実態に追いつかない法や制度矛盾を違法性阻却議論を経て、急場でのぐ措置と解釈する。

当方の入所利用者を眺めれば、一目瞭然Sの存在は異色。

寝たきり床上主体の生活者や自力歩行困難で車椅子に依る入所利用者が多い中、日常生活上何ら直接“手”を借りないSは赫奕たる異端。

ある一つの事柄をのぞいては……。

「お参り行って来ますでね」

ルーチン。

八

あつ！

そう誰かが発した時には闊歩していた。Sが正面玄関前の駐車場を。泰然自若。悠々と。慌てて真北が後を追う。

「Sさんっ！何処へ行くの？」

「チョットお参りに行かせてもらいますでね」

今にも施設の正門を跨またぐようとしている。

村道に隣接した施設敷地とは、此処が隔絶された空間でもあるかのように、あるいは娑婆しやばとの境界を知らしめる為か、幅1m深さ数十センチmの用水路が廻めぐっている。いくらグレーチングで覆っているも、足を踏み外すことだつてある。又、村道とはいえ道路は比較的交通量も多い。急に飛び出て自動車と出遭いがしらに……。

そんな惨事の想像を振り払いSの右肘を何とか引き寄せる。

「道路へ出ると危ないよっ！何処へ行くの？」

「智敬寺……兄ちゃんも一緒に来てくれる？」

「智敬寺って、三国の？歩いてはいけないよ……」

「行けるよ、そこだから」

屈託なく笑ってみせる。あまりに無邪気だ。認知症による幼児性退行がふと過ぎる。

このままでは……頭を掠かすめる。デパートの玩具屋の前で駄こ々を捏こねる幼児の様……。

肚はらを括くくった。

「じゃあ、ほんのそこまでね」

真北はそつとSの背中を抱きながら、別途へ誘導する。

正面玄関とは別口の職員玄関。そこから入つて、又施設内に戻る。そんな思惑を抱いて誘導した。

欺あざむかれたことを悟られないよう、何くれ気を引きながらSの背中を押す。

職員玄関の靴脱ぎ横には右手に大きな鉄扉がある。開閉後は職員個々の支給品のマスター・キーで施錠することを義務化している。利用者の安全確保。この場合、無断離設を防ぐ為。今のような。

鉄扉を過ぎればリハビリスペース、広い食堂ホール、その奥は仏間へと続く。

「いいでお参りしようか」

「ああ、お参りしましょう」

弾んだ声。Sはその気になってくれた。早速、ぶつぶつ言いながら手を合わせる。真北も同じように仕草を併せ、溜息を吐く。自嘲気味に。入所翌日の朝食後。繁忙な時間。

九

以来、虚を突いてやって来る。当然、当人にはその気はない。

いつ何時なんときにでも事務所に顔を出す。必ず真北の傍へ寄ってくる。

「お参り行って来ますでね」

言葉の文法上、主語はS自身だが真北への他力本願を期待している。

その後の会話は嘯み合わない。何とか気を逸そらそうと話題を変えても、つい彼女のペースに乗せられる。無邪気で穏やか、一途な笑顔がそうさせる。

「お茶の時間だよ」

真北は焦じれた口調で勧誘する。踵を返すS。

エレベーターに乗る。仏頂面の真北。屈託ないS。対極のふたり。無言。

5分後。何食わぬ顔で、またやって来る。もう忘れている。

真北へすり寄って来る。

「お参り行って来ますでね」

ルーチン。

十

根負けした。

もう秋口に入る。朝夕の風が冷たい。入所後数ヶ月経った。

その間――

施設での生活状況は逐一、真北が正克夫婦へ報告している。約束どおり正克夫婦は月に一度、必ず顔を見せる。京都からだと高速に乗っても片道、半日の覚悟が必要だ。大概、昼前に施設を訪ねSを伴い檀那寺へ。その後親子三人で外食する。

施設の中では個々の日課の他に、アクティビティがある。クラブ活動やレクリエーションなどの毎日の余暇活動だ。

誕生会やバイキング、選択メニュー、喫茶に外食会などの月行事。ひな祭りやお花見、遠足、七夕、納涼祭・・・季節の行事もある。市内の幼稚園や小学校、ボランティア団体からの慰問だつて、ほぼ毎月のように依頼される。

そのどれにもSは嬉々ききとして参加している。外出の機会があれば必ず連れ出してもいる。気分転換。気を惹く為。

いや、Sのルーチンから逃げる為・・・。

「チョットとお参りに行かせてもらいますでね。」

小春日和。季節を勘違いするくらい暖かい日差し。真北は根負けした。

「じゃあ、チョットだけね」

実は本当に、施設から歩いてチョットとの所に地区の鎮守、春日神社がある。

天気も良い。Sとふたり連れ立って散歩がてら、ぶらり同道しよう。

施設とは村道を挟んで北隣り、社殿を背中に向ける格好で春日神社はある。

社殿裏手は杉の林になっていて、施設との間を介している。林越しに見る大鳥居が無ければその存在は判らない。

「いい天気だねえ」

真北はSの上機嫌な顔を覗き込む。

「ほら、あそこに春日さんがあるからお参りしようね」

歩いて二、三分、参道を脇道から入れれば社殿だ。

拍手を打つ。二拜二拍手一拜。所作は作法に則っている。

この瞬間、Sのルーチンに一部変更。「チョツと行つて来ますでね」は智敬寺ではなく春日神社になった。

願い事、ひそ呟き声、聞き取れなかった。

「……」……じ……り……す……う……」

真北は意地悪してみたくなった。チョツとだけ。

いつもの仕返しだ……常にすり寄つて来て懇願される。「兄ちゃん、お参り……」やりかけの仕事が増える。今は忙しい……。

頼むから邪魔しないでッ。

ふふっ……

意地悪く笑い、Sをひとり置き去りにする。この後の彼女の行動が知りたかった。もちろん遠目からそつと見守り、安全には配慮する。転倒するとか、用水路にはま嵌るとか、危険な気配があれば、すぐに駆け寄れる距離から。

Sは真北の気配が消えたのを察知したようだが、意に反して動じる様子もなくスタスタと、戻っていく。施設の方へ。

せめて迷子のように右往左往、兄ちゃん何処行つた！くらいは叫んでもらいたいもんだッ。あれだけ人を振り回しておいてッ。

真北は意表を突かれた感じで、バツが悪そうにひとり照れ笑した。で、その後は額から臉にかげ縦じまの陰が差す——。

「格好悪い。大の大人がこそこそ鬼ごっこかよ……」

「ただいま、帰りました」

Sは事務職員に微笑みかけながら施設玄関を颯爽と凱旋した。あんなに好きだった兄ちゃんを置き去りにして……。

置いてけぼりをくつたあの日以来の良い天気だ。十一月某日。お昼休みの時間帯。今日、これで七回目のルーチン。

例によって事務所の真北にすり寄つて来る。

今日までに何度か参拝をお供した。早くおいで、と手招きすらされた。引率者は自分のほうと聞いたげ。

「兄ちゃん、行つてこさッ！」

誘いの声も堂に入って馴れ馴れしい。左肩に手を置かれる。真北はムツとして返事せずに眉間を寄せる。

「お参りに行つてきましよう——」。

次の句は猫なで声。

甘えても無駄……今日はこっちがペースをにぎる番。真北は敢えてSにかまわず放つぽつた。又も少し意地悪く……。

相手の意を察したか、Sもかまわず玄関へ健脚を踏み出す。自動ドアのスイッチはオフでない。

Sは開閉パネルをタッチする。何度も繰り返した所作。そこで引き返すことが多かったが……。

くぐもつた音を発してドアが開く。足早に左右の歩を振り出して行く。

結局、Sのペースに乗せられてお供することになった。ただしこっそり尾行する形で、後を追う。

Sは外気を心地よく吸い込みながら、風景を楽しんでいる様子。何の代わり映えない田舎道でも、Sにとっては新鮮なのが真北には腑に落ちた。

向こうから自転車に乗って、近所の農婦がやって来る。

「こんにちは——」
Sが嬉しそうに挨拶する。

農婦はSを視線に捉え一瞬間を強張らせる。「無断離脱」が頭を過つたか。が、すぐに尾行者の存在を察知しSに挨拶を返す。

「お散歩かい？」

「お参り行って来ますでね」
判で押したようないつものセリフのS。農婦とすれ違い際、唇の前で人差し指を立てる真北。

十三

Sの視界に入らないよう視野の効かない左後方から尾行する。今回は鬼ではなく刑事か探偵役。

職員員の通勤車の影に身を潜めながら。一台一台、息を殺して忍び足。

「俺は泥棒かッ」ひとり毒突く。
こちらに気付いた様子は無い。Sは悠々闊歩する。とうとう参道まで来た。

真北も慌てて追いつきSの左後方、美しい春日型の御影石の灯籠に身を伏せる。興信所の職員

もさもありなん、と少し興奮さえ覚えてきた。
Sは拝殿にたどり着いた。

賽銭箱の上、紅白に編まれた太い麻縄、真鍮製の大きな鈴へと、順に視線を上げ、両手でしっかりと太い鈴緒の麻縄を振る。

その動作に、少し遅れて神楽鈴が音を発する。ガランガラン。
真北は音に紛れて、拝殿に對をなす狛犬の一方に隠れる。またしても意地悪心が擡もたげる。

びっくりさせてやろうッ、と。

Sの背後に息を殺して忍び寄る。

刹那、
はつきりと聞いた。Sの願い。ルーチンの訳。

「あのこがぶじでありますように……」

暖かかった。午後の陽気のせいでは無いことを真北は自覚した。

ふたり手をつないで、参道に戻った。
いつもより、遠回りしたかった。

完